『中国地区英語教育学会研究紀要』No.24.（1994.10.1）

日本人英語学習者の受動文における誤りについての一考察(II)

― 日本語の影響の観点から ―

広島大学大学院　山　川　健　一

1　はじめに

本論は、拙論（印刷中）における調査の結果の分析を更に進めることを目的とする。前調査は、日本人英語学習者の和文英訳において、与えられた日本語の表現が英語の受動態の生成にどのような影響を与えるかを調べ、その全体的な傾向を見るものであった。本論では、まず、前調査を概観し（第2節）、次に、調査結果で見られた和文英訳における誤りの特徴と発生の規則性について論じ（第3節）、最後に本論のまとめと英語教育への示唆、そして今後の課題について述べる（第4節）。

2　前調査の概要

2.1.　調査目的

日本人英語学習者の和文英訳における受動文の生成において、与えられた日本語の表現がどのように影響するか調査する。

2.2.　調査方法

調査対象者：	広島県立K高校１年生	157名
	３年生	75名
	広島大学１年生（教育学専攻）	41名
	２年生（工学部）	38名
	計	311名

調査時期：　1993年7月上旬

調査材料：　和文英訳20問（10問ずつ2枚：問題文と英訳の解答例は APPENDIX を参照）
基本的には、本調査の高校生が中学校で使用した教科書（*New Horizon* 東京書籍）に記載されている英単語の知識で十分解答できるように問題を作成した。困難と思われる表現にはヒントをつけ、その表現を示した。

調査手順：　調査対象者には調査の目的は教えず、単に英作文の誤りを調べると告げた。成績等には関係ないが、できるだけ解答するように促した。高校生には10問ずつ2回に分けて行い、大学生には2枚同時に解答させた。時間制限は設けなかったが、合計20分程度でほぼ全員が完了した。

本調査の和文英訳20問は、与える日本語の観点から次の3つのカテゴリーに分類できる。

① 英語は受動態で表わし、日本語では受動態以外の表現で表わしているもの（8問）
② 日本語の他の態[1]（可能態・自発態）などを含んでいるもの（5問）
③ 日本語の間接受身と使役態を含んでいるもの（7問）

次節では、まず、カテゴリーⅠとⅡに関する結果を概観し（3.1.と 3.2.）、次に、この2つのカテゴリーで見られた誤りの特徴の共通性について論じる（3.3.）。そして、カテゴリーⅢに関する結果を概観し（3.4.）、カテゴリーⅢで見られた誤りの発生の規則性について論じる（3.5.）。

3　調査結果の再考察

3.1.　カテゴリーⅠの結果

カテゴリーⅠに属する問題文は以下の8問で、これらに共通していることは、対応する英文は普通受動態で表わすが、日本文では「(ら)れる」以外の表現形式を用いていることである。

1　その本は簡単な英語で書いてある（疑似受動文）
2　私はそのパーティーにさそいをうけた（迂言的な受動表現）
3　この花びんは田中先生から授かりました（自動詞）
7　その赤ちゃんは2時間後に見つかった（自動詞）
14　駅の近くにたくさんの家が建つ予定だ（自動詞）
11　彼女の手紙はボブが書いた（客体主題文）
12　私はあの背の高い人に英語を教えてもらった（授受文）
9　ボブは友達から好かれている（by の訳が「から」[2]）

正答率は、問題文11>1>9>12>3>2>7>14の順であり、問題文2（迂言的な受動表現）と問題文3・7・14（自動詞）における正答率が比較的低かった（被調査対象者の半数以下）。特徴的であったことは、(1)、(2)に見られるように、動詞の主体・客体を混同した誤りが、全ての問題文において見られたことである（多い順に、7>14>12>2>1>3>9>11）。

(1)　*The baby *found* two hours later.（問題文7）
(2)　*Many houses will *build* near the station.（問題文14）

3.2.　カテゴリーⅡの結果

カテゴリーⅡに属する問題文は以下の5問で、これらに共通していることは、「(ら)れる」という形態素が「受身」以外の意味を表わしていることである。

4　私はそんなに速くりんごを食べられない（可能態：能動的可能表現ー他動詞）
19　私は明日は行かれない（可能態：能動的可能表現ー自動詞）
16　日本ではこの種の動物は見られない（可能態：受動的可能表現）
5　毎年夏に高校時代のことが思い出される（自発態）
18　吉田先生は黒板にご自分の名前を書かれました（尊敬を表わす表現）

正答率は、 4>18>19>5>16の順であり、問題文5（自発態）と問題文16（受動的可能表現）における正答率がかなり低かった（それぞれ 36.7%、22.9%）。主要な特徴として、(3)のように、主客混同の誤りが問題文5・16・18で約20～30%見られたことが挙げられる。

(3)　*This kind of animal cannot *see* in Japan.（問題文16）

3.3.　カテゴリーⅠとⅡの結果の考察

本節では、カテゴリーⅠ・Ⅱで見られた主客混同の誤りについて更に考察を加える。主客混同の誤りが見られた問題文は他動詞を含むものであり、問題文 1・2・3・5・7・9・11・12・14・16・18の計11問であった。この11問の問題総数は3421個（被調査対象者311名×11問）であり、このうち84.4%である2889個が実際に解答された。主客混同の誤りは693個であり、解

答総数の約24%を占めた。主客混同には様々なパターンが見られたが、以下の2つの型(「自動詞型」と「逆方向型」)で主客混同総数の8割以上が説明できた。

3.3.1. 自動詞型

自動詞型の誤りが見られた問題文は、1・2・7・14・16の5問であり、これらは与えられた和文で動作主が明示されていない直接受身表現[3]である。図1は典型的な直接受身表現(英語の受動態もこれに相当する)を図式化したものであり、「YはXに〜される」の意味を表わす。一方、図2は、自動詞型の誤りを図式化したものである。英訳の際、本来なら受動態を用いるところで、動作主が明示されていないからか、「受身」の意味を和文から読み取ることができず、動詞の動作の方向を自動詞的に表わし、結果として以下の例のような自動詞型の主客混同の誤りになったと考えられる。

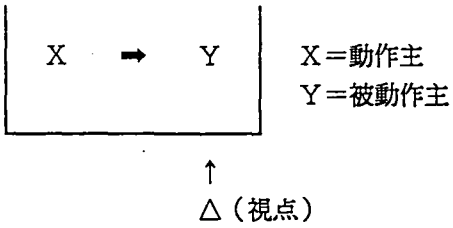


図1. 典型的な直接受身表現

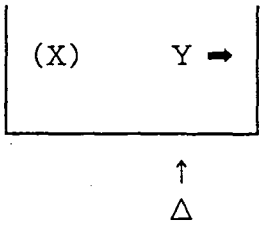


図2. 自動詞型の主客混同の誤り

1	その本は簡単な英語で書いてある	*The book *wrote* in easy English.(12.5%)
2	私はそのパーティーにさそいを受けた	*I *invited* to the party.(13.2%)
7	その赤ちゃんは2時間後に見つかった	*The baby *found* two hours later.(37.9%)
14	駅の近くにたくさんの家が建つ予定だ	*Many houses will *build* near the station.(29.9%)
16	日本ではこの種の動物は見られない	*This kind of animal cannot *see* in Japan.(21.9%)

3.3.2. 逆方向型

逆方向型の誤りが見られた問題文は、3・5・9・11・12・18の6問であり、これらは与えられた和文で動作主と被動作主が明示されている能動表現や直接受身表現である。図1のような「YはXに〜される」の意味を表わす際に、和文の動詞の動作の方向を逆に解釈し、結果として図3のような逆方向型の誤りになると考えられる。動作主Xに視点を置けば、本来能動態になるものが受動態になり(以下「逆方向X型」)、被動作主Yに視点を置けば、本来受動態になるものが能動態になって生じる(以下「逆方向Y型」)。

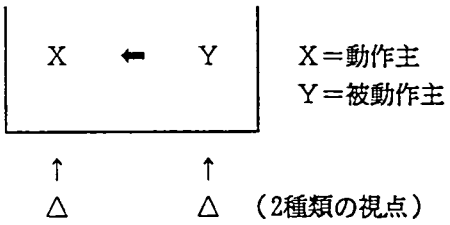


図3.　逆方向型の主客混同の誤り

3　この花びんは田中先生から授かりました
　逆方向X型　*Mr. Tanaka *was given* this vase. (0.6%)
　逆方向Y型　*I *gave* this vase by Mr. Tanaka. (6.4%)
5　毎年夏に高校時代のことが思い出される
　逆方向X型　*I *am remembered* my high school days.... (9%)
　逆方向Y型　*My high school days *remember* every summer.... (0.3%)
9　ボブは友達から好かれている
　逆方向X型　*His friends *are liked* by Bob. (0%)
　逆方向Y型　*Bob *likes* his friends. (8.7%)
11　彼女の手紙はボブが書いた
　逆方向X型　*Bob *was written* her letter. (0.3%)
　逆方向Y型　*Her letter *wrote* Bob. (4.8%)
12　私はあの背の高い人に英語を教えてもらった
　逆方向X型　*That tall man *was taught* me English. (0.3%)
　逆方向Y型　*I *taught* English that tall man. (17.7%)
18　吉田先生は黒板にご自分の名前を書かれました
　逆方向X型　*Mr. Yoshida *was written* his name on the blackboard. (19.6%)
　逆方向Y型　*His name *wrote* Mr. Yoshida on the blackboard. (0%)

3.4.　カテゴリーⅢの結果

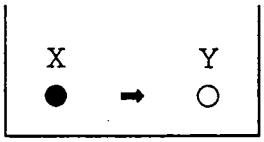
カテゴリーⅢに属する問題文は、間接受身が4問、使役が3問である。

8　私は自分の時計をこわされた（間接受身：他動詞）
10　私は2年前に父に死なれた（間接受身：自動詞）
17　私は手紙を母に読まれた（間接受身：他動詞）
20　昨日雨に降られた（間接受身：自動詞）
6　その母親は自分の息子に牛乳を飲ませた（使役態：他動詞）
13　私はその戦争で息子を死なせた（使役態：自動詞）
15　私は彼に歌を歌わされた（使役態：使役受身）

日本語の受動態は、受身主語の影響のされ方から、「直接受身」と「間接受身」の2種類に分類できる。カテゴリーⅢの結果に移る前に、まず、寺村（1982: 247）に基づいて、これらの受身の特徴について概観する。

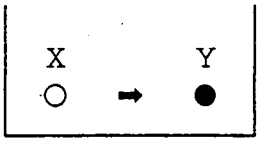
ます、図4は、通常の能動表現「XがYに～する」を表わしている。ここでは、描き手の焦点はXにある。そして、これに対応する直接受身の表現が、図5の「YがXに～される」であ

る。ここでは、描き手の焦点はYに移り、受身主語のYはXから直接的に動詞の表わす動作を受けている。この直接受身表現は、英語の受動態とほぼ同じ関係にあると言える。一方、間接受身（図6・7）においては、受身主語のWは、図の四角の枠内の事象全体から、間接的に影響を受けている、ということが特徴として挙げられる。例えば、図6 の例文「私は父に死なれた」においては、「父が死ぬ」という事象全体が間接的に「私」に影響を与えており、同様に、図7 の例文「私は彼に息子を殴られた」においては、「彼が息子を殴る」という事象全体が間接的に「私」に影響を与えている。日本語の間接受身は、対応する能動態を持たず、しばしば「迷惑」の意味を伴い、英語にはこれに相当する受動態は存在しないと言われている [4]。



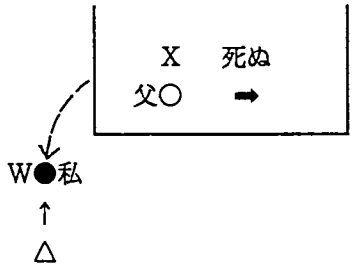
「XガY ニ～スル」

図4.　能動表現



「YガX ニ～サレル」

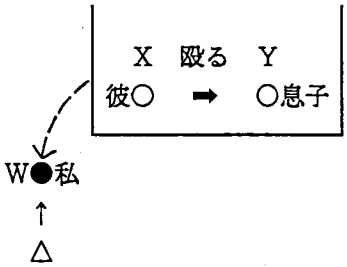
図5.　直接受身表現



「WガX ニ～サレル」

「私は父に死なれた」

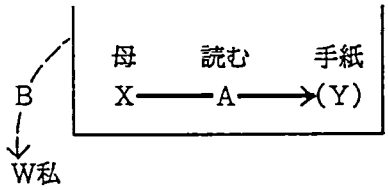
図6.　間接受身（自動詞）



「WガX ニY ヲ～サレル」

「私は彼に息子を殴られた」

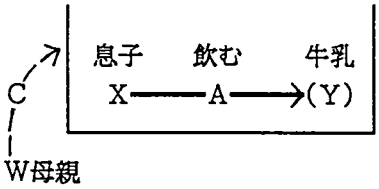
図7.　間接受身（他動詞）



「WハX ニ（Y ヲ）Aサレル」

「私は手紙を母に読まれた」

図8.　間接受身（問題文17）



「WハX ニ（Y ヲ）Aサセル」

「その母親は自分の息子に牛乳を飲ませた」

図9.　使役（問題文6）

間接受身と使役の違いは、図8・9（寺村 1982: 289 に基づく）が表わすように、図の四角の中の事象と、第三者であるWとの関係の方向の違いに着せられる。そして、図8の間接受身においては、四角の事象内の動詞の動作の方向Aと、その事象が第三者Wに与える影響の方向Bが混同され、(4)のような誤答が生じ、また、図9の使役においては、四角の事象内の動詞の

動作の方向Ａと、その事象を引き起こすＷからの影響の方向Ｃが混同され、(5)のような誤答が生じた。

(4) *I was read my letter by my mother.

(5) *The mother was drunk milk by her son.

この混同の頻度は問題文によって異なり、間接受身の他動詞の場合と使役受身の時は混同されやすく（被調査対象者の約40％）、間接受身の自動詞の場合とその他の使役の時は比較的そうでなかった（約25-30％）。

3.5. カテゴリーⅢの結果の考察

本節では、前節で見られた方向の混同の誤りをα型とβ型に分けて考察する。α型は、与えられた和文の「～は」に当たる部分（図8・9のＷ）を英文の主語にして、その後に方向を混同した be ＋ p.p. を続けたもので、β型は動作主（図8・9のＸ）を英文の主語にして、その後に方向を混同した be ＋ p.p. を続けたものである。例えば、問題文17（「私は手紙を母に読まれた」）の場合、α型とβ型の誤りはそれぞれ(6)、(7)のようになる。

(6) *I was read my letter by my mother.（α型の誤り）

(7) *My mother was read my letter.　　（β型の誤り）

カテゴリーⅢの7問の問題文において、問題総数は2177個（被調査対象者311名×7問）で、そのうち80.5％の1752個が実際に解答された。方向の混同の誤りは691個であり、解答総数の約40％を占めた。誤答数の多さは、間接受身α型＞使役α型＞間接受身β型＞使役β型の順であり、α型とβ型の割合は約11対3で、α型が圧倒的に多かった。

α型やβ型の誤りは、 以下の3つの条件（Ⅰ～Ⅲ）が複雑に影響して発生すると考えられる。与えられた和文が以下の条件を満たす数が多くなればα型の誤りが増え、条件を満たす数が少なくなるとα型が減少しβ型が微増することが判明した。

条件Ⅰ	「～は」に当たるものが、与えられた和文で明示されている、または、動作主が明示されていない
条件Ⅱ	「～は」に当たるものが何らかの影響を受ける（図8のＢの矢印が存在する）
条件Ⅲ	動詞が他動詞である（図8・9においてＹが存在する）

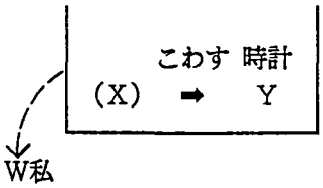
次に、以上のことを踏まえ、カテゴリーⅢの7つの問題文について、条件を満たす数が多い問題文から順に提示していく。満たす条件の数が少なくなればなるほどα型の誤りが減少し、β型が微増していることがわかる。

＊3つの条件を満たすもの（問題文8・15・17）

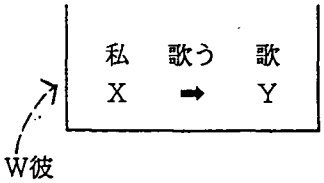
8　私は自分の時計をこわされた（間接受身：他動詞）

α型　39.9％　（*I was broken my watch.）

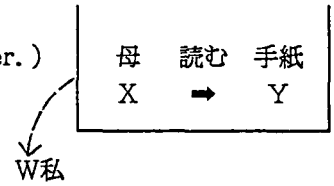
β型　なし　　（*Someone was broken my watch.）



15　私は彼に歌を歌わされた（使役受身）
α型　44.4%　（*I was sung a song by him.）
β型　1.3%　（*He was sung a song.）

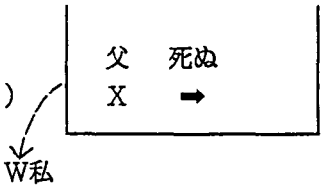


17　私は手紙を母に読まれた（間接受身：他動詞）
α型　41.2%　（*I was read my letter by my mother.）
β型　0.6%　（*My mother was read my letter.）

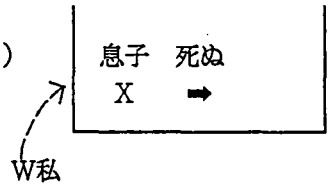


*2つの条件を満たすもの（問題文10・13・6）

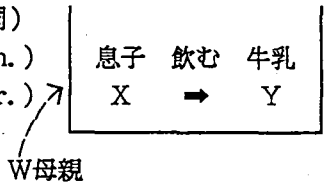
10　私は2年前に父に死なれた（間接受身：自動詞）
α型　16.4%　（*I was died by my father....）
β型　4.8%　（*My father was died two years ago.）



13　私はその戦争で息子を死なせた（使役：自動詞）[5]
α型　15.8%　（*I was died by my son in the war.）
β型　4.8%　（*My son was died in the war.）

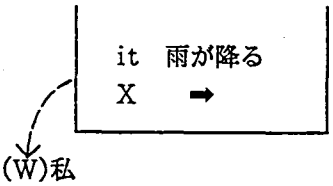


6　その母親は自分の息子に牛乳を飲ませた（使役：他動詞）
α型　15.1%(*The mother was drunk milk by her son.)
β型　11.0%(*Her son was drunk milk by the mother.)



*1つの条件を満たすもの（問題文20）

20　昨日雨に降られた（間接受身：自動詞）
α型　1.6%　（*I was rained yesterday.）
β型　24.4%　（*It was rained yesterday.）



α型の誤りがβ型の誤りよりも圧倒的に多かった（11対3）理由は、本調査の間接受身と使役の問題文は、上記の3つの条件を満たすものが多かったから、すなわち、α型の誤りの出現を誘発するものが多かったからと言える。

4　結論

4.1.　本論のまとめ

前調査の問題文のカテゴリーⅠ（英語では受動態で表わし、日本語では受動態以外の表現を用いるもの）とカテゴリーⅡ（日本語の他の態を含んでいるもの）においては、動詞の主客混同の誤りが共通して見られ、「自動詞型」と「逆方向型」に分けられた。自動詞型の誤りは、与えられた和文で動作主が明示されていない直接受身表現で生じた。これは、英訳の際、本来なら受動態を用いるところで、動作主が明示されていないからか、「受身」の意味を和文から読み取ることができず、動詞の動作の方向を自動詞的に表わしたものである。一方、逆方向型の誤りは、与えられた和文で動作主と被動作主が明示されている能動表現や直接受身表現で生じた。これは、英訳の際、和文の動詞の動作の方向を逆に解釈し、本来能動態で表わすところを受動態で表わすか、または、本来受動態で表わすところを能動態で表わしたものである。

前調査のカテゴリーⅢ（間接受身と使役）では、受身（使役）主語と事象との関係の方向と、事象内の動詞の動作の方向との混同の誤りがみられ、α型とβ型に分けられた。α型は、与えられた和文の「～は」に当たるものを英文の主語にして、次に、方向を混同した be + p.p. を続けたものであり、β型は、事象内の動作主を英文の主語にして、次に、方向を混同した be + p.p. を続けたものである。α型とβ型の誤りは無秩序に生じるのではなく、与えられた和文が条件Ⅰ～Ⅲを満たす数によって決定されることが判明した。満たす数が多くなればα型の誤りが増え、満たす数が少なくなるとα型が減少しβ型が微増する傾向があった。

4.2.　英語教育への示唆と今後の課題

前調査と本論から、動詞の自・他の違いの理解は受動態の学習・使用に大きな影響を及ぼすことが判明したので、動詞の語彙的意味の指導を十分にする必要があると言える。そして、学習者は和文英訳の際、和文の「～は」に当たる部分を、次に続く動詞との意味的関係をあまり考えず、英文の主語にする傾向があるので、主語と動詞の意味的関係に注意するよう促す必要がある。また、英語の使役構文を導入する際、受動態との関係を十分考慮するようにし、日本語の使役や間接受身の影響から生じる典型的な誤りの例を提示し、なぜ非文かを考えさせたりすることも有用であろう。

今後の課題としては、前調査や本論で判明した傾向を、別の調査対象者や別の問題文などを用いて更に詳しく調べることが考えられる。特に、なぜ条件Ⅰ～Ⅲがα型の誤りと関係していたのかについて、更に深く考察する必要があろう [6]。

註

1　寺村は態を「補語の格と相互関係にある述語の形態の体系」（1982: 208）と定義している。これによると、態は文法的な態（受動態、可能態、自発態、使役態）と語彙的な態に分けられる。

2　問題文9では、「(ら)れる」が用いられており、カテゴリーⅠにはそぐわないが、便宜上このように分類した。

3　日本語の受動態は、受身主語の影響のされ方から、「直接受身」と「間接受身」の2種類に分類できる。これらの受身については、3.4. を参照。

4　英語には、「私は父に死なれた」や「私は手紙を母に読まれた」の意味内容を表わす表現形式が全くないというわけではない。「不利益」を表わす “on” を用いたり(i)、「経験受動態」（passive of experience）(ii)を用いたりして、「被害・迷惑」の意味を表わす

ことができる。

(i) My father died on me.

(ii) I had my letter read by my mother.

しかし、これらは、英語の受動態の通常の表現形式である、be + p.p. という形態を持たず、別の表現形式で表わされているという点で、英語には日本語の間接受身に相当する受動態は存在しないと言える。

5 図を見るかぎり、問題文13は条件Ⅱを満たさないが、意味的に考えると、「自分の息子が死ぬ」ことによって、親である「私」は何らかの精神的影響を受けると考えられるので、条件Ⅱを満たし、α型とβ型の誤りは問題文10と似た割合を示している。

6 この点に関しては、拙論（1994）を参照。

参考文献

奥津敬一郎 1984 「文の組みたてーSVO構造と<たちば>ー」 野村雅昭（編）『講座 日本語の表現２ 日本語の働き』 東京 筑摩書房

奥津敬一郎 1992 「日本語の受身文と視点」 『日本語学』 8月号 11/9 4-11

金田一彦 1982 『金田一彦・日本語セミナー２：日本語のしくみ』 東京 筑摩書房

久野暲 1983 『新日本文法研究』 東京 大修館書店

寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 東京 くろしお出版

仁田義雄（編） 1991 『日本語のヴォイスと他動性』 東京 くろしお出版

早川勇 1983 「日英語の受動表現」 鳥居次好・黒川泰雄（監修）『教育英文法の基礎ー語彙・品詞論の見直しー』 東京 三友社出版

松井恵美 1979 『英作文における日本人的誤り』 東京 大修館書店

水谷信子 1985 『日英比較話し言葉の文法』 東京 くろしお出版

村木新次郎 1989 「ヴォイス」 北原保雄（編） 『講座 日本語と日本語教育４ 日本語の文法・文体（上）』 東京 明治書院

村木新次郎 1991 『日本語動詞の諸相』 東京 ひつじ書房

山川健一 1994 「日英語の受動態の機能面における相違についてー日本人英語学習者の受動文における誤りと関連してー」 中国四国教育学会『教育学研究紀要』 第39巻第2部 138-143

Yamakawa, K. (in press) Error Analysis of Passive Sentences Written by Japanese Learners of English: With Reference to Native Language Transfer. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 5.

APPENDIX

1 その本は簡単な(easy)英語で書いてある （疑似受動文）

(The book is written in easy English.)

2 私はそのパーティーにさそいを受けた （迂言的な受動表現）

(I was invited to the party.)

3 この花びんは田中先生から授かりました （自動詞）

(Mr. Tanaka gave me this vase; I was given this vase by Mr. Tanaka;

This vase was given (to) me by Mr. Tanaka.)

4 私はそんなに速く(so quickly)りんごを食べられない（可能態:能動的可能表現（他動詞））
(I can't eat an apple so quickly.)

5 毎年夏に高校時代のこと(my high school days)が思い出される （自発態）
(I remember my high school days every summer; I am reminded of my high school days every summer; Summer reminds me of my high school days every year.)

6 その母親は自分の息子に牛乳を飲ませた （使役態（他動詞））
(The mother gave her son some milk; The mother let (made) her son drink some milk.)

7 その赤ちゃんは２時間後に(two hours later)見つかった （自動詞）
(The baby was found two hours later.)

8 私は自分の時計をこわされた （間接受身（他動詞））
(My watch was broken; I had my watch broken; Someone broke my watch.)

9 ボブは友達から好かれている （by の訳）
(Bob is liked by his friends.)

10 私は２年前に父に死なれた （間接受身（自動詞））
(My father died (on me) two years ago; I lost my father two years ago.)

11 彼女の手紙はボブが書いた （客体主題文）
(Bob wrote her letter; Her letter was written by Bob.)

12 私はあの背の高い人に英語を教えてもらった （授受文）
(That tall man taught me English; I was taught English by that tall man; I had that tall man teach me English.)

13 私はその戦争で息子を死なせた （使役態（自動詞））
(My son was killed in the war; I lost my son in the war.)

14 駅の近くにたくさんの家が建つ予定だ （自動詞）
(Many houses will be built near the station.)

15 私は彼に歌を歌わされた （使役態（使役受身））
(He made me sing a song; I was made to sing a song by him.)

16 日本ではこの種の動物(this kind of animal)は見られない（可能態:受動的可能表現）
(We cannot see this kind of animal in Japan; This kind of animal cannot be seen in Japan.)

17 私は手紙を母に読まれた （間接受身（他動詞））
(My letter was read by my mother; I had my letter read by my mother; My mother read my letter.)

18 吉田先生は黒板(blackboard)にご自分の名前を書かれました （尊敬を表す表現）
(Mr. Yoshida wrote his own name on the blackboard.)

19 私は明日は行かれない （可能態：能動的可能表現（自動詞））
(I can't (won't be able to) go tomorrow.)

20 昨日雨に降られた （間接受身（自動詞））
(It rained (on me) yesterday; I was caught in the rain yesterday.)